

白居易撰・朱金城箋校『白居易集箋校』上海古籍出版社、一九八八年

律令研究会編『訳註日本律令』五・八 唐律疏議訳註篇 一九七九年～一九九四年

劉俊文『敦煌吐魯番唐代法制文書考証』中華書局、一九八九年

岡村繁『新秋漢文大系 白氏文集』八 明治書院、一九〇六年

(えがわ・しきぶ、中国隋唐史、明治大学兼任講師)

平成二十九年十月二十一日(土)、第一回比較思想学会北陸支部研究大会(兼北陸宗教文化学会第二十四回学術大会)が開催された。石川県西田幾多郎記念哲学館を会場とし、大会参加者は会員・非会員を含め約二十五名であった。

午前の部では一般発表が行われ、午後の部では大会テーマ『白山開山一三〇〇年を迎えて——近世近代を中心に』に沿ったシンポジウムが行われた。

一般発表は午前中四題、午後二題の計六題あり、いずれもレベルの高い研究発表であった。発表者は石川県、福井県在住者が各二名、富山県、京都府在住者であり、仏教思想、東西の現代哲学、宗教民族学、建築思想、文明史等、多岐にわたっていた。また、石川県を代表する靈山である白山が開山一三〇〇年の記念の年であることから、専門家を迎えるシンポジウムを行った。昨年度まで行っていた基調講演を取りやめ、発題者を四名に増やして実施した。参加者の数は多くはなかったが、いずれも最新の研究に基づく発表であり、中身の濃いシンポジウムとなつた。

大会全体の詳細は研究例会報告に譲りたい。

## 比較思想研究の動向

### 1 比較思想関係の刊行物(単行本)

頬住光子『さとりと日本人』(ぶねうま舎、二〇一七年一月)

わたしたちは美しい対象を目前にして、一步も動かず、立ち止まり、その対象をじっと見つめている。この絶対の受動性にとどまることによってこそ、わたしたちは自由をうる。このことを、草木風水と共に振し合うなかで捉え直し、表現してきたところに仏教の深さと広さがある。

本書は、移ろいゆく無常の直中にあって、わたしたちが有限な自己自身を超えて無限に連なる一点を、日本人の心性に深く浸透している仏教における「さとり」として捉え直し、「自我一如」であり、「縁起・無自性・空」であるとはいなることかを問い合わせ直し、それを、鴨長明や吉田兼好がそうしたように、具体的な表現として描き出そうとする詩的な一書である。ここでいう「詩的」とは、著者が深い眼差しを注いできた道元が、他分野の多くの人々の「いま、ここ」を触発し、震撼させ、それぞの個性と資質が向かうべき方向を照らし出してきたことに連なるものである。

「食と仏教」、「武士の思想と仏教」、「和とは何か」、「徳という思

」には、広い意味で比較思想に関する内外の文献・研究・講座・学会ならびに研究者の動向などを集めて収載した。

想」、「修行」から「修養」へ、「共生の根拠」という六つの章からなる本書は、各章が互いに共振し、共鳴しあつてゐる。それが可能となるのは、全章に著者の鋭い眼差しによつて見出された道元の詩性が息づいているからにほかならない。

第一章「食と仏教」で著者は、釈迦の前世譚における「捨身行」に依拠しつつ、「食べる／食べられる」を「食べさせる／食べさせてもらう」の関係に転換することに、わたしたちの知性の極みを見る。さらに、本書の主題をなす「自他一如」、「縁起・無自性・空」の思想を、「施しを受ける」という屈辱を通して生命維持をなす「托鉢」において問い合わせ直してゆく。それは、忌み嫌われる、あるいは、無きものとされる「糞掃衣」や「塚間住」という在り方を通して、目を背けたくなるような現実をじつと見つめる目を養つてゆく。

第三章「和とは何か」で著者は、「十七條の憲法」と「わび茶」を取り上げる。和とは、身分や地位といった互いに相反するものが一致し、調和が奏でられることである。茶室や椀や床の間に飾られた一輪の花の優しさや脆さをじつと見つめる直中で、宇宙の関係の網目の一点たる自己自身をじつと見つめている。

第五章「修行」から「修養」へは、著者と道元の詩性が輪

舞するもつとも美しい章である。発心の契機となる「盆に浮かんだ桜の蕾」や「稲穂の波」は、有限な人為と無限な宇宙を交差する点であり、そこに、榮華の極みにおける「虚無」から宇宙につらなる「空」へと転じうる可能性が見出される。

評者は、シモース・ヴェイユを中心に研究している者であるが、なぜ、幼年の頃、日本史にのめり込んだのか、なぜ、夭折したユダヤ系フランス人女性の思想に惹かれているのか、バラバラであった点と点が、本書の照らし出すやわらかな光のなかで、連なりを得たように感じた。たったひとりの真の受け取り手が思想を開いてゆくおそらく、たったひとりの真の受け取り手が思想を開いてゆくであろう。そこにこそ、人文学の豊かさがある。

(今村純子)

末木文美士『日本思想史の射程 日本歴史 私の最新講義』(敬文舎、二〇一七年四月)

著者の末木文美士氏は本学会の第九代会長であり、また、前回の世界哲学会議(二〇一三年アテネ大学)仏教学セクションでは代表責任者として国際的に活躍された。その会場は、参加者で溢れ、活発な討論が展開された。特に、ナーガールジュナの否定表現の解釈をめぐる議論は白熱した。さて、この書は著者の専攻である仏教学に始まり仏教学を含めた日本の思想史全体を捉え直す方向で意図されている。この仏教理解が極めてユニークで、インドで誕生した仏教が、日本では予測もしない形で発展した。その伝播を著者はカレーライスに喩えている。カレーはインドが元祖であるが、日本では全く違ったカレーになり、今日の日本に広く

日本の三国が結びついた三国史観を紹介する。資料としてハーヴィード大学美術館から発見された「五つの仏教地図」を提示する。この史観は、日本の中世の世界像を代表する可能性がある。近世になると「天」の思想が展開されるが、この天が国家神道と結びついた平田篤胤の考證が興味深い。特に篤胤のキリスト教理解で、ノアの箱船の話である。篤胤によると皇國は万国の頂上に位置するという。その証明が、ノアの洪水である。この洪水が皇國に及ばなかつたのは、皇國が高いところにあつたからである。科学的真偽は別にしてこうした発想があること自体面白い。各章、知見に満ちているが、紙面の都合上、伝えきれない。東日本大震災からの災害論、国際的に普及している湯浅泰雄氏の研究を踏まえた身心論、文化儀礼(天皇を讃える表現)としての和歌、平泉文化の再考など読者にお任せしたい。

(中富清和)

末木文美士『思想としての近代仏教』(中央公論新社、二〇一七年一月)

本学会の前会長である末木氏によつて著された本書は、近代仏教を思想という観点から論じ、近代の仏教が、近代の日本の思想の中核となってきたことを明らかにしている。本書は、二〇〇九年から二〇一六年にかけて発表された近代仏教に関する同氏の研究をまとめたものである。本書に掲載された著作のいくつかをすでに読んだ方も多いだろうが、それらが公表された機会は多岐にわたり網羅するのは難しかつたであろう。しかし、本書ではそれらを通覧することができ、また、同氏の近代仏教に対する一貫し

普及している。この喻えに象徴されるようにこの書は、極めて明快、わかりやすく多くの聴衆に語りかけるようだ。それで本人が副題で記しているように「私の最新講義」である。一番の印象は、日本人の論理的思考力の強さの証明である。從来から西洋に比べて日本人は感性的で論理的能力に劣るよう見られてきた。それに対するアンチ・テーゼである。それが第一章である。ここでは、豊富な仏教論理学例をあげて、日本思想の論理性を論証する。法然の例が興味深い。法然は「選択本願念佛集」において、念佛が正行であることを示す。淨土教というと信仰中心で、理論が弱く思われるがちであるが、末木氏によると「選択本願念佛集」の体系は極めて理論的に緊密に構成されているという。以下、全体の構成を紹介する。

## 序 章 方法・思想／思想史／思想史学

- 第一章 論理：日本仏教における論理の変容
  - 第二章 世界・日本の世界像
  - 第三章 自然・宗教と自然
  - 第四章 災害・日本人の災害観
  - 第五章 人間・身心観の展開
  - 第六章 文化・儀礼と創造
  - 第七章 國土・平泉の理想
  - 終 章 歴史・神話／歴史／天皇
- 第二章では日本の世界像が語られている。伝統からすれば「古事記」や「日本書紀」の記紀神話を想起するが、著者は、從來考察されなかつたインドの須弥山(しゅみせん)を中心に、中國、

た問題意識をみることもできる。

現在、近代仏教が改めて見直されつつある。それは、近代といふ時代が一段落し、それを反省するべき状況になつていている。こうした状況の中で、近代の営為を反省することは急務となつていて。本書は、こうした問題関心のもとに著された。

近代仏教は、近年では研究が盛んになつてきているものの、それほど評価されてこなかつた。その理由はさまざま考えられようが、ひとつには、仏教研究においては、インド仏教研究を至上のものとし、それ以降の仏教を堕落と捉えたことにある。また、日本仏教の中では、鎌倉新仏教の祖師が頂点とされ、発生前史としてそれ以前を捉え、それ以降の展開を堕落化と捉えた。こうした見方により、近代仏教は注目されてこなかつたのである。

しかし、鎌倉新仏教を日本仏教の最高峰と位置づける鎌倉新仏教中心史觀それ自体が、近代の産物である、と同氏は言う。明治初期に形成された日本仏教の特徴には、近代日本の社会情勢の変動の影響を受けて生じた、宗教の内面化、純粹化(神仏分離)、そして世俗化という三つの「仏教モダニズム」的な方向性がある。

この影響の下、近代仏教の代表的な思想家である淨土真宗の清沢満之、日蓮主義の田中智學、禪の鈴木大拙らは思想を形成した。これらの思想家の特徴は、儀礼や外的な組織よりも内面の心に重きをおくる心理主義的な傾向であり、まさにこの状況に影響を受けているといえる。彼らを代表とする近代知識人たちの営為は、鎌倉新仏教の祖師を近代的に再解釈しつつ、仏教教理の近代化をはかるものであつた。他方で、仏教は、近代の社会体制をイデオロ